

入学試験問題（二月一日午前）

国語

（五〇分）

氏 名

〔注意〕

- 一、試験開始までに、この〔注意〕をよく読んでおいてください。
- 二、監督者かんとくからの指示があるまで、この問題冊子さっしを開いてはいけません。
- 三、監督者からの指示があったら、冊子の中から解答用紙を取り出し、QRコードのシールを貼り付け、受験番号と氏名を記入してください。それが終わったら解答用紙を裏返してください。問題冊子の表紙にも氏名を記入してください。
- 四、試験開始の合図があったら、この問題冊子のページ数（９ページまであります）を確認してください。
- 五、問題冊子や解答用紙に、印刷が悪くて見にくいところや汚れなどがある場合は、だまって手をあげて監督者に知らせてください。ただし、問題の内容に関する質問には答えられません。
- 六、答えはすべて解答用紙に書いてください。
- 七、問題文をよく読み、設問の指示にしたがって、丁寧な字で記してください。
- 八、字数制限がある問いは、「、」や「。」やカギカッコなどを字数に含みます。
- 九、試験終了後は、解答用紙を提出し、問題冊子を持ち帰ってください。

Ⅰ 以下の文を読んで、次の問いに答えなさい。

早弥は子どものころから、**A** 子だった。

折り紙も、ねんども、リボン結びも、幼稚園時代の早弥にはぜんぜんできなかった。小学校に入ると、体操服の着替えはいつもびり。体育のあった日のランドセルには、靴下が入っていた。どんなに大急ぎでやっても、靴下までまわらないのだ。

三月生まれだからかもしれない。体も小さく、何をやっても人並みにできなかった。

中学生になったとき、弓道をやろうと思ったのは、部活説明会で素敵だと思ったのは本んだけど、これなら自分にもできるかもしれないと思ったからだ。

足の速さや俊敏な反射神経も要求されない。引張つては離すだけで、矢は勝手に飛んでいってくれる。

けれど、それは大まちがいだ。初め的前練習をした日、たった二本の矢を射ただけで、早弥はへとへとになってしまった。

「不必要なところに、力がたくさん入っているようですね」

坂口先生から言われた。そしてそれを気にしたとたん、呼吸は乱れ、動きはちぐはぐになった。

そんな早弥を尻目に、実良はどんどん上達していった。ぱさん、ぱとんと情けない音を立てて、矢道に矢を落とす早弥の隣で、実良は心地よい中的音を軽やかに鳴らし続けた。

実良は天才なのだ。自分とはちがう。

坂口先生が、夏の試合について重大な発表をしたのは、期末テストが終わった日だった。試合まで一週間。ここからは、毎日試合形式で、集中的に練習をしていくというタイミングだった。

「今年は、個人戦、団体戦ともに、柏木さん、石田くん、伊吹さんの三人で登録をしました」

心臓が、大きく一つ音を立てた。

一瞬、静まり返った。

なんで、わたしが。

鼓動が速くなる。

とっさに実良を見た。ぱかんとしている。

早弥の予測に反して、実良の調子はなかなか戻らない。それもおかしい具合だった。近距離から巻きわらに打ちこむ練習のときには問題なく射ることができた矢が、的の前に来るととつぜんコントロールがきかなくなるのだ。フォームにも呼吸にも問題がないのに、離れのタイミングだけがずれてしまうらしかった。

「五秒です。五秒待ちなさい」

その日も、坂口先生は実良につきつきりで指導していたが、実良の状況は変わらなかった。弓と体が引き合っている会の状態で、五秒は待つのがふつうだが、なぜか一秒も待てない。

「試合までに、実良の、松原さんの調子はよくなると思いますけど」

B 言葉が早弥の口について出た。実良のことだから、すぐによくなるはずだと思う。第一自分には、荷が重すぎる。

「確かに松原さんの調子はよくなります」

「じゃあ」

① その先をあせる早弥に、先生はさとうようにゆっくりと言った。

「けれど、今日明日のうちに直るというものではないように、わたしには思えます。あせりは禁物です。その場しのぎで無理やり調整しても、かえって悪くなってしまうこともあるのです」

「いつまで待てばいいんですか」

せきを切ったように、実良はきいた。

「公式の大会じゃなくて、練習試合には出られるんですか？」

「それはわたしにもわかりません」

「そんなあ」

「ただ、言えることは、今の状態はきつと直るということです。今はひたすら精進しなさい。矢数を重ねなさい。そして、直ったときには、あなた自身が今よりもずっと大きな人間になっているということですよ」

「そんなのぜんぜんわかりません」

実良は大きく首を振り、そのままがつくりと頭を落とした。先生は静かに声をかけた。

「それがわかれば、精進する必要もないでしょうね」

なんだか禅問答みたいだ。

あまりかねたように実良は立ち上がった。

「もう、いい！」

ガラスが割れるように叫んで、体操服のまま道場から飛び出していった。

ガクあじさいが枯れていた。水切りをしなかったせいだ。棚の下には、実良が残っていた荷物が一かたまりになっている。

逃げ出したかったのは、わたしのほうだ。

団体戦のレギュラーになるなんて、まったく予想外だった。そりや、選ばれる人たちがうらやましく思う気持ちはあるけれど、自分にはそんな力はないことは、わかっている。

「はあ」

大きなため息をつく早弥に、

「これ、届けてやろう」

と、春が実良の荷物に指をさした。道具入れの中には、制服も入っているはずだから、これがないければ、明日は困るだろう。

けれど、早弥はすぐには返事ができなかった。実良にしてみても、自分よりもへたくそな人がレギュラーに選ばれて、きつとおもしろくないだろう。どんな顔をすればいいのだ。

「わたしが行こうか？」

案じたように言ってくれた由佳に、早弥は首を振った。先輩にそんなことをさせてはいけない。

「大丈夫です。春、行こう」

早弥は実良のバッグをつかんだ。たわなにぶら下がったマスコットが揺れるそれを、肩にかけた。ずっしりと重い。それはそのまま、早弥の肩にかかった試合へのプレッシャーのようだった。

「いくら調子が悪くても、実良が出たほうがましやないんかな」

歩きながら早弥は春にたずねてみた。正直な気持ちだったけど、言葉にしたらひどくみっともなく思えてくる。

自分でもうんざりするような問いを春は真剣に受け取ってくれたのか、じっと考えこんでいる。

やがて、ぽつんと言った。

「③早弥は試合には出たくないんか」

質問を質問で返されて、とまどった。そんなこと考えたことがなかったのだ。入部したときから、自分が一番へたっぴだったから、三人しか出られない枠に入るとは考えたこともなかった。

「もっと自分を信じるっちゃ」

質問に答えられないで黙っていると、春はそう言った。

「信じられん」

「なんで」

「だって、わたしだよ？」

だめな自分のことはよくわかってる。

「だいたい、早弥はおびえすぎなんちゃ。おれだって、怖いんよ」

「だって、わたしが一番へたくそなんよ。春とはちがう」

春とだけじゃない。段位を持っている由佳とはもちろんのこと、才能にあふれている実良とも自分はちがいきすぎる。

「そりやみんなちがうやろ」

春は言った。ふと春を見る。C 静かな目だ。春が言うと、「ちがう」という言葉は

果てしない意味を持つように思えた。

(まはら三桃『たまごを持つように』による)

問一 A C に入れるのに最もふさわしい言葉を次のア～カからそれぞれ一つ

ずつ選び、記号で答えなさい。

ア 正直な

イ 不器用な

ウ 迷惑そうな

エ わがままな

オ いいかげんな

カ 思慮深そうな

問二 ①「その先」について、「じゃあ」に続けて早弥が言おうとしたせりふを考え、

二十字以上二十五字以内で書きなさい。

問三

②「飛び出していった」について、実良がこのような行動に出た理由として最も

ふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 周りは弓道の腕前が上達し、自分だけがどんどん下手になっていき取り残されて

いるように感じて耐えられなかったから。

イ 今の状態がいつ治るかも、なぜこの状態になってしまったのかもわからず、どう

してよいかわからなくなってしまうたから。

ウ 自分よりも実力が下の早弥がレギュラーに選ばれたことに納得がいかず悔しかっ

たので、一緒に練習をしたくなかったから。

エ 先生は、実は実良の不調の背景がわかっているがあえてわからないと自分に言っ

問四

③「早弥は試合には出たくないんか」について、春がこのような発言をした理由

として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 早弥と同様にレギュラーに選ばれた自分をも否定された気分になったから。

イ 試合に出たくない早弥の意志を確認し、坂口先生に伝えようと思ったから。

ウ レギュラーに選ばれた重圧から抜け出せない早弥を励まそうと思ったから。

エ レギュラーに選ばれたのに、喜ぶそぶりを見せない早弥に怒っているから。

問五

本文全体の中から、季節の様子と、場面の雰囲気(ふんいき)の両方を示している一文を探し、最

初の六字を抜き出しなさい。

問六

この文章の特徴として最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答え

なさい。

ア 第三者の視点を通して物語が描かれることで、読者が主人公から一定の距離を保

てるようにしている。

イ 多くの登場人物の心情を細やかに表現することで、読者が感情移入しながら読み

進められるようにしている。

ウ 比喩や擬人法などの優れた表現技法を多用することで、読者が物語の世界を想像

しやすく読めるようにしている。

エ 会話文と会話文の間に自分を批判的に語っている部分があることで、主人公の心

の動きを読者が読みとりやすいようにしている。

2 以下の文を読んで、次の問いに答えなさい。

意見が相違する場合、ちょっとした言葉遣いの違いによって、自分や相手を否定する度合いが違ってきます。特に、一つしか答えがない場合、それほど強く思っていないのに、相手を否定してしまうことにもなります。そして、意見が対立する場合、人間関係の対立のゲインとなることもあるのです。

ただし、意見が対立した場合、理想的なことは、その違いを楽しむことです。

(中略)

意見が違うということは、お互いに自分の頭で考えているということでもあるわけです。

A、学校の図書室にまんがを置いてもいいかどうか、安楽死は認めるべきか、というように、世の中にはいろいろな「論争(ディベート)の種」があります。お互いに意見の違いを戦わせることで、自分の頭を鍛え、考えを深めることができます。意見の違いは、まずは、楽しむべきことだと言えます。相手の意見を受け入れ、自分も主張していく、といったことをまずは楽しみましょう。いろいろな考え方と触れることで、自分も考え方が深くなります。

ただ、理想通りにいかないこともあります。意見が違うことで、何か感情的な「わだかまり」ができてしまうこともないわけではありません。相手との人間関係が安定していないような場合などは特にそうでしょう。

ここで、「感情」と「意見の違い」ということについて、少しだけ考えてみましょう。

よく、意見が相違する場合、違う意見が言いにくい、という話を耳にします。B、

違う意見を言ったために、その人から感情的に反発されてしまったということも聞くことがあります。

私たちは、誰でも、自分のことを認めてほしいというコンパンの欲求を持っています(これは強すぎても弱すぎてもいけない欲求です)。自分の言うことは一応信じてほしいし、自分のことを無視されるのはいやです。自分の意見に対しても同じことで、私たちは、自分が主張することに対して、基本的には認めてほしい、という欲求を持っていると言えます。多くの場合、相手の意見が自分の意見と同じであるほうが、何となく安心したりするもののためでしょう。自分の意見に挑戦されて、それをおもしろがる人は、自分に自信がある人です。C、中にはそういう自信がなくて、面とむかって反対されたり否定されたりすると、自分が認められていないというように感じてしまうという人もあります。もちろん、情報の信頼性や意見の妥当性は、その人の人格とは全く別の事柄ですから、自分が主張することが否定されたからといって、自分が認められていない、などと考える必要はありません。D、自分の意見に対して疑問を持たれたり、反対意見を持たれたりしたからといって感情的になってしまふことは決して望ましいことではありません。ただ望ましいことではないにせよ、現実には、そういう感情的なことも切り離せないのです。

そこで、^②こうしたことに関連した問題が三通り起こり得るのです。

一つは、自分の意見に対して疑問や反対意見が言われた場合に感情的になってしまう場合です。この場合には、「しっかり考えて、感情におし流されないように気をつける!」としか言いようがありません。受け入れるべきは受け入れ、それでも自分は違うと思うなら、そ

の根拠も含めて明確に主張していけばいいでしょう。どうしてもよければ聞き流してもかまいません。自分なりにしっかりと考えることが大切です。特に、知的な内容の事柄であれば、内容は内容、気持ちは気持ち、というふうに分けて、感情はひとまずコントロールする必要があります。これは心構えの問題です。

次に考えられるのが、自分が自分の意見を配慮なしに言ったために、相手を不用意に感情的にさせてしまうという失敗です。「言い方に配慮があればきちんと伝えることができたのに、そうしなかったばかりに感情的反発を招いてしまった」という失敗は、誰しもあるのではないのでしょうか。

さらにもう一つ、相手の感情に「遠慮」しすぎるあまり、言うべきことが言えないという場合もあります。はつきり言わなかった(言えなかった)ために、最終的にあとで強く後悔してしまうというのにもよくあることです。これは目立った「失敗」とは認識されにくい点で、よけいにやっかいな問題かもしれません。

人間は感情を持つ動物ですが、その感情のために、しっかりとした意見の交換ができなくなることも現実にはあります。その意味で、感情は「コミュニケーション上の障害」となり得るものです。

そこで、そういうコミュニケーション上の障害を乗り越えるために、^③「言いにくいことを言う場合の作戦」を考えてみるというのはどうでしょう。どのように言えばいいか、という「表現」への視点を持つてみるのです。こう考えてみることで、自分の心をコントロールすることもやりやすくなります。言うべきことも、きちんと考えた上で言えるようになります。

また、そういう視点を持つていけば、ほかの人から何かを言われた場合でも、「言い方」の問題と「内容」の問題とを分けて考えることができます。そうすることで、「自分のことを客観的に見る見方」「素直に自分の至らなさを認める心」を呼び覚ますこともできるでしょう。

自分が「正しい」と思うことを言うのに、もちろん、「X」はいりません。しかし、時と場合によっては「Y」はあっていいでしょう。逆に、そうした「Z」を試してみることで、「言うべきことが言えないまま」になることも「フセ(げる)」のカタカナをそれぞれ

(森山卓郎『コミュニケーションの日本語』による)

問一 || a「ゲンイン」、|| b「コンパン」、|| c「フセ(げる)」のカタカナをそれぞれ漢字で書きなさい。

問二

A、Dに入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | |
|---|------|------|------|------|
| ア | A例え | Bしかし | Cまして | Dそこで |
| イ | A例え | Bまた | Cしかし | Dまして |
| ウ | Aまた | B例え | Cだから | Dそこで |
| エ | Aまして | Bまた | C例え | Dしかし |

問三——①「相手の意見が自分の意見と同じであるほうが、何となく安心したりする」とあるが、それはなぜか。本文の言葉を用いて二十五字以上三十字以内で答えなさい。

問四——②「こうしたことに関連した問題」の具体例としてふさわしくないものをア～エから一つ選び、記号で答えなさい。なお、次のア～エは「学校の図書室にまんがをお

いていいか」という話し合いをしている場面を想定している。

ア まんがを置くことに反対している人に対して「まんがの良さがわからないなんてだめなやつだ」と言ったら相手が泣いてしまった。

イ 「まんがは人をだめにするので置くべきではない」と言われ、自分とは違う意見だったので大声で「それは絶対に違う」とさげんだ。

ウ 「学校の図書室にまんがを置かないほうがいい」という意見が多数派だったので、反論してもしかたがないと思って自分の意見は言わなかった。

エ 自分は「まんがにも学習の役に立つものもある」という意見をもっていたが、反対するといやな気持ちになる人が出てくると思ったのでだまっていた。

問五——③「『言にくいことを言う場合の作戦』を考えてみる」とはどういうことか。最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手の感情を戦略的に読み取るという表現への視点を身に着け、相手を思いやつて自分の意見を主張すること。

イ あらかじめ論理的な考えができる人に相談し、台本をつくるなどをして十分に考えた上で感情をこめて話すということ。

ウ 自分の意見を伝える時に相手が感情的にならないようにするためには、どのような言葉を選べばいいのかを考えてみる。

エ 相手からの発言を「言い方」の問題と「内容」の問題に分けて、言い方が間違っている時にはそれを指摘しながら議論を進めていくということ。

問六——X Zに入る言葉の組み合わせとして最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。

ア X 遠慮 Y 遠慮 Z 配慮

イ X 遠慮 Y 配慮 Z 配慮

ウ X 配慮 Y 配慮 Z 遠慮

エ X 配慮 Y 遠慮 Z 遠慮

問七

この文章の内容に最もふさわしいものを次のア～エから一つ選び、記号で答えなさい。自分が正しいと思ったことは主張しないと後悔してしまうので必ず主張すべきであり、その際は感情を抜きにして考えたほうが良い。

イ 感情的になると意見を客観的に判断できなくなるので、論争の場面では感情を一切もちこまずただ自分の意見を論理的に話すべきである。

ウ 意見を言い合う際に感情的な問題が生じコミュニケーションがうまくいかない場合があるが、「表現」に着目することで解決することがある。

エ 意見が違っていると感情的なわだかまりが生まれてしまうので、自分の意見を言う時には必ず相手がどう思うのかを考え遠慮しながら話すべきである。

問八

友達から遊びに行こうと誘われたときに、本心ではその遊びに興味がないのに参加するという人がいます。あなたはこの人の行動に賛成ですか、反対ですか。そのように考える根拠とともにあなたの意見を一五〇字以上二〇〇字以内で書きなさい。(一マス目から書き始め、途中で改行はしないこと)

3 次の問いに答えなさい。

問一 次の（ ）には後の語群のいずれかを使った慣用句が入ります。（ ）に入る慣用句を解答らんに書きなさい。

- ① 友だちと旅行に行くことを許してくれないとは、なんて（ ） 親なんだ！
- ② 何日も掃除そうじをしていない庭は（ ） 状況だ。
- ③ 歩きすぎて（ ） になった。

語群.. 足 頭 腕 顔 目

問二 （ ）の中の言葉を適切な敬語けいごに直し、解答らんに書きなさい。

（「お……になる」「……れる、……られる」「お……する」以外の形に直すこと）

- ① 私わたしの代わりに先生がやって（くれました）。
- ② 片付けは私わたしが（します）。

【問題はこれで終わりです】



問四

問五

問六

問七

問三

問二

問一

2

c

a

b

25

30

問六

問五

問四

問三

問二

問一

1

A

B

C

20

25

問二

問一

3

①

③

①

②

②

問八

200

150



↓ここにシールを貼ってください↓

受験番号

I

A

氏 名

得 点

